

ゴルフの歴史と精神

ゴルフ部 柳田隆久（昭和 46 年卒）

1. 自然との闘い

ゴルフは自然を相手に戦いを挑むスポーツといっても過言ではありません。フィールドのように縦横の長さが定尺ではなく、自然の地形の中にコースが造られています。ボールを打ち出す「ティ・グラウンド」から直径 10.8cm のカップのある円形状の「グリーン」までは高低差だけでなく、全体的に起伏があって、途中には池や川や「バンカー」と呼ばれる砂地の大きなくぼみもあります。緑のじゅうたんのように見えるグリーンも真平な部分はほとんどなく、芝目も自然条件によってできるので、起伏や芝目を総合的に考えてパットしなくてはなりません。また、ゴルフ・コースは山間部やシーサイドにあることが多く、風の影響を大きく受けます。雨の日もあれば、酷暑や極寒の日もあります。天気が猫の目のように変わる本場英国スコットランドでは、1 日のうち、半袖、日傘から厚手のセーター、雨傘、レインウェアまで着替えることもあり、「1 日の中に四季がある」と言われるほどです。

しかし、全天候型スポーツと言われるゴルフも絶対プレーできない気象条件の 때가二つあります。それは、積雪と雷です。雪が積もると転がったボールが雪だるまになって探せなくなりますし、雷が鳴る中で金属製のクラブを振り回す行為は、正に人間避雷針になって人命にかかわる事態になるかもしれないからです。

この大自然の中でプレーするゴルフの妙味の一つは、300m 超えのドライバー・ショットも僅か数 cm のパットも同じ一打は一打、その価値に違いはないということです。

2. 起源と発展

ゴルフの起源については諸説あって、どれも決定的な証拠が無いために不明ですが、英国スコットランドで近代スポーツとして確立されたことは間違いないとされています。スコットランドからゴルフは英国中に広まりました。さらに当時七つの海を股にかけていた大英帝国の人達が世界中に広め、ゴルフ・コースを造りました。なかでも一番大きかったのは 1890 年代になってアメリカ合衆国に渡ったことです。広い国土、温暖な気候、大資本に恵まれて瞬く間に全米中に広がりました。

また、日本への伝来は 1901 年、神戸六甲山に英国人貿易商アーサー・グルーム氏が自身の別荘を開墾し、4 ホールのコースを作ったことにさかのぼります。まさにこれが日本のゴルフ・コースの誕生です。日本に上陸したゴルフですが、当初、一部特権階級の遊びと考えられていたためか、なかなか普及しなかったようです。

それが一つのきっかけで第一次ゴルフ・ブームが起きました。1957 年、「カナダ・カップ」という競技の日本での初めての大会が東京霞ヶ関ゴルフ倶楽部で開催されたのです。これは、一か国 2 人ずつ 30 か国、計 60 人の選手が自国の名誉をかけて団体と個人のタイトルを競うものでしたが、見事日本チームが両方とも優勝してしまいました。この模様は、

連日テレビで全国に中継され、人々はゴルフの面白さに酔いしれました。これは戦後12年、復興の最中にあった日本にあって、かつて戦時中の敵国であった米、英を二大大国とするゴルフ競技の世界大会で日本人が完全優勝するという快挙が、敗戦後、鬱積していた日本人の心に勇気を与え、自分達もやればできるんだ、という気持ちにマッチしたというのが偽らざるところでしょう。

それから第二次ゴルフ・ブームがやってきます。最初の日本での開催から9年目の1966年、また「カナダ・カップ」が東京よみうりカントリー・クラブで開催されました。それには当時の世界のBig 3といわれたアメリカ合衆国のアーノルド・パーマー、ジャック・ニクラウス、そして南アフリカ連邦のゲーリー・プレーヤーがそれぞれの国の代表として来日し、異次元のプレーを目の当たりにしたファンは度肝を抜かれました。

日本中で、この頃から企業の発展とともに一般ゴルファーの数も増え始め、社用族と呼ばれる人達がゴルフを社交の道具として使うようになりました。新設されたゴルフ場は会員権を大量に発行し、バブルの崩壊までそれが高値で取引されていました。やはり、日本でのゴルフの発展と本国イギリスのそれとはかなり違うように思われます。

ちなみに関西学院大学体育会ゴルフ部の創設は、昭和25年2人の大先輩が「ゴルフ同好会」を作ったことに始まります。その後、紆余曲折の末、昭和29(1954)年「運動総部ゴルフ部」に昇格し、現在に至っています。その間、関西だけでなく、日本の学生ゴルフ界を牽引する存在となり、男子団体・男女個人それぞれのチャンピオンを輩出しております。また、今までに延べ10数人の男子プロゴルファーが誕生しました。

今、世界中に200か国以上、約34,000か所のゴルフ・コースがあるとされています。オリンピックでは、第2回パリ、第3回セントルイスで開催されましたが、その後中断し、2016年のリオで112年ぶりに復活、2021年の東京でも開催されました。

話が後先になりましたが、世界最古のゴルフ・コースはスコットランドにあるセントアンドリュース・オールドコースです。ここは今から約470年前の1552年に誕生しました。日本の時代に置き換えるとちょうど戦国時代で、1560年の「桶狭間の戦い」の8年前になります。ゴルフは日本ではまだまだ歴史が浅いですが、世界的には結構古いスポーツといえます。このコースは自然がそ

のまま生かされていて、大きな起伏の土壤に草のような芝が貼り付けられ、1番高い木でもせいぜい人間の背の高さ位の灌木となっています。秋冬になると北海から冷たい風が吹きつけて芝生も大木も育たず、アメリカ合衆国や日本でよく見かける庭園美を誇るコースとは程遠いものでありますが、これこそがゴルフ・コースの原点とされていて、



世界のゴルフの総本山 R&A の建物と世界最古のゴルフ場セント・アンドリュースゴルフリンクス (写真提供：執筆)

現地の人達からは畏敬の念を込めて「神と自然が造り給うたゴルフ・コース」と呼ばれています。そしてここは単なる遺跡ではなくて、今も世界の4大メジャー競技・トーナメントの一つである全英オープンの開催地として5年に一度は使用されており、「ゴルフの聖地」として世界中のゴルファーの憧れの的なので、ハイシーズンになるとなかなかプレーの予約が取れないというのが現状です。

世界のメジャー競技について触れましたが、4大競技といえば、この全英オープン、全米オープン、全米プロ、そしてゴルフの祭典と言われるマスターズ・トーナメントがあり、世界中のゴルファーが名誉と高額賞金をめざして挑戦しています。

4大メジャー競技に日本人チャンピオンを輩出することが、長年日本ゴルフ界の悲願でしたが、2021年松山英樹選手がマスターズ・トーナメントを制してその夢を果たしました。

3. ルール・ブック

ゴルフのルール・ブックはR&A (Royal and Ancient Golf Club of St. Andrews) と呼ばれる世界のゴルフの総本山である全英ゴルフ協会と U.S.G.A. と呼ばれる全米ゴルフ協会が共著で英語で作成し、世界各国で翻訳されています。

ルール・ブックの第1章はエチケットについて書かれています。列記順は重要さ順と思われるので、最初にエチケットが記されているようにゴルフは紳士・淑女のスポーツともいわれ、プレーをする以前にマナーと立ち居振る舞いを非常に大切にする競技だということがわかります。

「ゴルフはほとんどの場合、レフェリーの立ち会いなしで行われる。また、ゴルフゲームは、プレーヤーの一人ひとりが他のプレーヤーに対しても心配りをし、ゴルフ規則を守ってプレーするというその誠実さに頼っている。プレーヤーはみな、どのように競い合っている時でもそのようなことに関係なく、礼儀正しさとスポーツマンシップを常に示しながら洗練されたマナーで立ち居振る舞うべきである。これこそが正にゴルフの精神なのである。」

これはゴルフをプレーする人に対してのアドバイスでもお願いでもありません。ゴルフをするからにはこれを必ず守らなければならないというルールそのものなのです。

4. 日本のゴルフ事情

バブル崩壊後、日本では新規にゴルフ場の建設はありません。本場米国でもリノベーション程度で新設はないそうですが、オリンピック人気もあって世界的には増え続けています。この数年の間にもジョージア、ベラルーシ、アゼルバイジャンではその国の第1号のゴルフ場が開設されました。

ところで、日本のゴルフ界には年金と同じように2025年問題があります。今、日本のゴルファーの数は少しずつ減っていき、団塊の世代と言われる人達が2025年には全て後期高齢者になります。若い世代のゴルフ離れは従来から言われていることなので、その頃になると日本のゴルフ人口が極端に少なくなってしまうかねません。そうなると約2,400か所あるといわれているゴルフ場も閑古鳥が鳴き、経営に行き詰ってしまいます。また、

周辺のゴルフ産業も同じように痛手を受け、日本のゴルフ界自体が衰退してしまうのではないかと恐れられています。

これを打開するのには若い人達を中心にもっとゴルフに親しんでもらうのが一番と思います。ゴルフは生涯スポーツです。何歳から始めても遅すぎることはありません。老若男女、上級者、ビギナー、誰でも同じように楽しめます。自分の力量にあったティから打てばよいし、何よりもゴルフにはハンデキャップがあるために誰でも同じ基準で順位が競えます。

また、昨今のコロナ禍にあって、密を比較的避けられるイベントとしてゴルフが見直されていて、ほとんどのゴルフ場が活況を呈しているという追い風が吹いています。

5. プロゴルファー

今、日本のプロゴルファーの数は男子約 5,000 人、女子約 1,000 人とされています。プロゴルファーは、客にゴルフ場や練習場でレッスンをして報酬を得るレッスンプロとツアー競技に出て賞金や広告料を稼ぐトーナメントプロの二つに大別されます。ツアーの一般的な日程は木金 2 日が予選ラウンド、土日が決勝ラウンドです。120 名くらいの選手が出場する中で、金曜日が終わった段階で半数の選手が一円の賞金もなく会場を去っていき、残りの約半数の選手で土日賞金争いが行われることになります。ツアーに出ると経費もかなり掛かり、往復の交通費、宿泊費、キャディ等を引かれると、かなり稼がないと採算が合わないことになります。男子プロ約 5,000 人の中で、ある程度以上のレベルの生活が出来て、堂々とプロゴルファーだと胸を張れる選手は、その中で 50 人くらい、ひと握りとうよりひとつまみです。どこの社会も現実はなかなか厳しいことが分かります。

話は少し変わりますが、世界のゴルフ史の中で偉人とされている人の事についてぜひ触れておきたいと思います。その人物はジョージア州アトランタ生まれのアメリカ人ボビー・ジョーンズ（1902～1971）です。本職は弁護士で生涯アマチュアを通したことでも有名です。当時のメジャー 4 大競技を 1 年間で全部制覇し、年間グランドスラムを 28 歳の時に達成しました。グランドスラムという言葉がスポーツ界で使われるようになったのはこの時が最初だといわれています。ちなみに、ゴルフ界で年間グランドスラムを達成した人は彼以外いません。彼はその後、数か月して引退し、元の弁護士稼業に戻りました。そしてそれから数年後に、友人とともに生地アトランタ郊外のオーガスタ市にオーガスタ・ナショナル・ゴルフ倶楽部を造り、マスターズ・トーナメントの産みの親になったのです。彼はゴルフの技術の素晴らしさもさることながら、人格識見に優れ、類まれなるスポーツマン精神の持主であり、ゴルフの祭典と言われるマスターズ・トーナメントを創設した功績から「球聖ボビー・ジョーンズ」と呼ばれ、今でも世界中のゴルファーから尊敬されています。あのタイガー・ウッズも少年時代にボビー・ジョーンズの伝記を読んで、生涯をゴルフに捧げようと決心したと彼の自叙伝に記しています。

6. フェアプレーの精神

『優勝トロフィーを勝ち取るより大切なことが人生にはある』

ゴルフが唯一レフェリーのいないスポーツであることはルール・ブックのところでも述べました。レフェリーがいないが故に自分で自分を律しないと競技として成り立ちません。このことをよく表した大変有名なエピソードが世界のゴルフ史にはあります。

時は 1925 年、アメリカ合衆国ボストン市郊外のウスター・カントリークラブで第 29 回全米オープン選手権が開催されていました。前出

の球聖ボビー・ジョーンズが 2 位に 1 打差をつけて最終日最終ホールのティ・グラウンドにやってきました。最終 18 番ホールはパー 4 のやさしいホール。ボビーはティ・ショットを右のラフに打ち込みましたが、セカンド・ショットを難なくグリーンに乗せて 2 パット、計パー 4 でホールアウトしました。誰もがボビーの優勝を信じて疑わなかったのですが、彼はこのホールを 5 と申告してしまいます。その結果、2 位の選手に並ばれて、翌日 2 人でプレーオフをしましたが、その日では決着がつかず、さらに次の日の再プレーオフで一打差をつけられ、ボビーは負けてしまいます。

試合後、たくさんの新聞記者がボビーを取り囲み、質問をしました。「ボビー、本番最終日の 18 番はどうして 5 なの？ 僕たちには 4 にしか見えなかった。てっきり君が全米オープン・チャンピオンだと思ったよ。」ボビーは答えました。「あれは 2 打目のラフからのショットを打とうと構えた時に、少しボールが動いたかもしれない。というより僕には動いたように見えたんだ。だから 1 打足して 5 にしたんだよ。」記者曰く「でもそれは君以外誰もわからないよ。ましてや深いラフの中に沈んだボールだから、真上から見ている君以外分かりようがないよ。君があのまま 4 と申告しておけば、君はその時点で全米オープン・チャンピオンになり、世界一のゴルファーという称号が得られたじゃないか。もし、君の言うことが本当だとしたら、君はなんてすごい人なんだ。素晴らしすぎるよ」と誉めました。「そうだ、そうだ」、と一斉に声を上げるベテラン記者たちを前にしてこの弱冠 23 歳の若者は涼しい顔で次のように答えました。「皆さん、今日あなた方が仕事が終わって、会社や自宅に帰った時に『お帰りなさい』と出迎えてくれた人にこう言うのでしょうか。『僕は今日一日、朝から 1 度も銀行強盗はしていないよ。偉いだろう。こんな偉い僕をほめてくれ。』と自慢するのでしょうか？」この一言を聞いた瞬間、並みいる記者たちは水を打ったように静まり返り、記者会見は潮が引く様に終わってしまいました。

翌日の全米のスポーツ新聞は各紙トップでボビーのこの高邁なスポーツマンシップ、神がかり的なフェアプレーの精神を誉めたたえる活字が飛び交いました。一般紙のニューヨーク・タイムズのコラム欄でも当代一のコラムニストが、この顛末を書いてボビーを絶賛しました。そのコラムのタイトルは「優勝トロフィーを勝ち取ることよりも立派なこと



千刈カントリー倶楽部にある「NOBLE STUBBORNNESS」の石碑
(写真提供：執筆者)

が人生にはある。」でした。

この話は 100 年近くも前のアメリカ合衆国でのゴルフの世界の話ではありますが、この時代、この国の、この競技にこんなすごいスポーツマン精神を持ったアスリートがいたのだということをぜひ覚えていてほしいと思います。

本学の学生は Mastery for Service というスクールモットーや体育会員なら NOBLE STUBBORNNESS というスローガンを学んでいると思いますが、私はもう一つ心に Fair Play という文字を刻んでほしいと思います。皆さんは人生の生き方について、今までも両親、恩師、先輩等からいろいろ教えられていると思いますが、私は人生をフェアに生きるという事が一番大切だと思っています。決して嘘つきにはならないでください、ズルをしないでください。関学生の皆さんは常にフェアプレー精神にあふれた人間になって社会に羽ばたいて欲しいと願ってやみません。